2024年
4月

# マナ通信

今月のマナ通信は、
◎日々のみことば2月号（申命記、詩篇、マルコ）
◎ローマ人への手紙（３：２５－３１）の感想です。

教会へ行かせてもらうようになって、最初に学んだのは「基礎の学び」でした。記憶に残るのは、神の特質で神は「聖く」、「正しく」あるが故に罪を許さず罰する方であること、そして、神は「愛」のある方で、我々を憐れんで下さる方であることでした。講話の中で心に残る教えは、

“我々人間は今まで生きてきて多くの失敗すなわち罪を犯して来た、いまさら悔いても取り返しがつかない！
しかし、神はその罪を全て帳消しにして下さる。リセットして下さったのです。”

過去の罪が消える！・・・もう一悩まなくても良い。後悔しなくても良い！・・・大きな喜びでした。

続けてマルコの福音書を学び、使徒の働きへと移って行ったのでした。マルコは12弟子ではありませんので、イエス様と一緒に生活をしていません。イエス様のことはペテロから聞いてこの福音書を書いた様です。当時はローマ帝国の支配下にあり、悪政ネロ皇帝のもと、住民は大変苦しめられていた様です。
そんな中、異邦人であるローマの人々に福音が伝わるようにマルコはこの福音書を書いたのです。

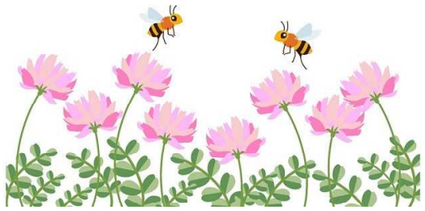
その為、登場したイエス様は神の国について教え、自分が神である故に出来る奇跡を行い、救いの為にこの世に来られたことを教えながら一直線にカルバリの十字架に向かって歩み出します。

しかし、人々は理解出来ず、イエスはおかしくなったと噂し、特にエルサレムから下ってきた律法学者は彼はベルゼブルにつかれていると批判しました。御霊に属することは、生まれかわった者にしか解らないのです。だが大半の民はイエスを頼り現状からの救いを求めました。神であるのに人間の姿をとってこの世に送り出されたイエス様はどこへ行っても大変な人気でした。

人々は一目見たくてイエス様のもとに集まりました。ツァラウトの人や障害を持った人々を、その心純心さのゆえに癒やされました。死人までも生きかえらせました。カペナウムでは大変な人だかりで、屋根の瓦をはいで病人を運び入れる始末です。それが為、イエス様は、パリサイ人や律法学者の反感や嫉妬をかいいのちを付け狙われます。

全てのことを神は出来るのです。「嵐よ、静まれ」、「山よ、動け」と命令すればそのようになります。神は創造主であるがゆえに、秘められた奥義としての知恵を持っておられ、被造物である人間とは次元がちがうのです。

対称的に、この世には神に対して悪魔がいます。悪魔は人間にささやきかけ堕落させ罪を起こさせようと虎視眈々と狙っています。この世は悪魔の世です。テレビでは常に人間がおこす醜い事件が報道されています。「肉に従う者は、肉に属することを考えますが、御霊に従う者は、御霊に属することを考える」とパウロが言ってます。



イエス様は宣教活動を開始されるに当たり、バプテスマのヨハネから洗礼を受け、荒野にてサタンの誘惑を経験されました。私たち人間の代表として罪を負うこと、サタンの誘惑をうけ、勝利すること、イエス・キリストの生涯の意味がここに示されています。５章でゲラサ人の地で、汚れた霊レギオンにつかれた男が、墓場から出てきて裸で大暴れしていた。しかし、悪霊は神に一目おいていました。荒野でのイエスとの戦いで敗れたことが分かっているのです。

イエス様は汚れた霊を追い出し、その悪霊を豚のからだの中に入れ、湖でおぼれさせました。悪霊が出て行った後、服を着て男が座っているのを見て、人々は驚きました。

次に、モーセを通して神から与えられた律法ですが、旧約から新約に移ろうとしていた中間時代には、律法学者もパリサイ人も律法に拘泥（必要以上に気にする）して、その精神を見失ってました。守れないものを守ろうとするから無理があります。当時の教師（ラビ）が、旧約聖書の細かい点を解説して多くの付け加えをしました。この付け加えが聖書と並ぶほど人気がでました。

人間による付け加えと、神の啓示である聖書を同一視することをイエスは厳しくとがめています。それはコルバン（ささげ物）になったといえば神のものとなり、それを父と母のために使わなくても良いことになったのです、年老いた親の扶養義務を命じる「あなたの父と母を敬え」との戒めも、守らなくてもよいことにしたのです。

選民であるイスラエルも、異邦人も苦しんでいます。こんな状況の中、イエス様は十字架で我々の罪の贖いのため死んで下さいました。そして、３日後に復活なされました。

これはとりもなおさず、罪人である我々の為に律法の要求を満たすためでした。それは、罪によって生きるのでは無く、神の御霊によって生きる為でした。古い立場から新しい立場に移し替えられたのです。我々は御霊によって活きる者とされたのです。喜びがわきあがります。（畑中伸之）

神はこの方を、信仰によって受けるべき、血による宥めのささげ物として公に示されました。ご自分の義を明らかにされるためです。神は忍耐をもって、これまで犯されてきた罪を見逃してこられたのです。（**ロマ3:25**）

使徒パウロは教会の指導者たちと別れを告げる時には、神の教会を牧することについて、その教会は「神がご自身の血をもって買い取られたもの」と何度となく強調しております。

他の聖書記者たちは、単に主の“死”について語るだけであるのに、パウロは主の“血”について語るのだろうか。なぜことさらに主の“血”を口にするのだろうか。これは死活に関わる大切なことで、死ではなく“血”とは私たちの主が私たちを贖ってくださった仕方が、旧約聖書がいけにえに関して教えていることと一致させていることを語ってくれています。

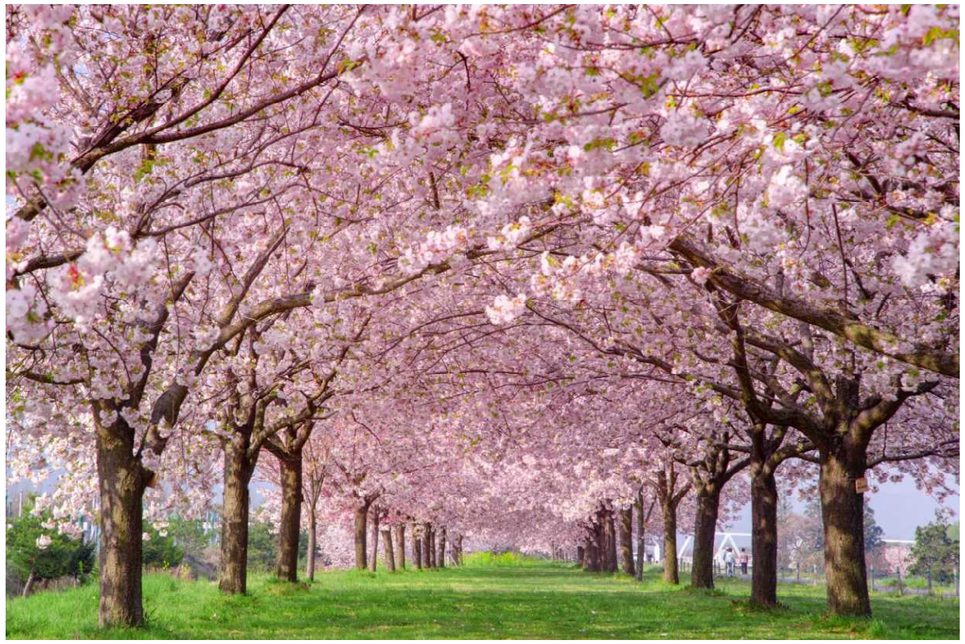
新約の中にあるすべては、旧約の中で預言されていました。新約は旧約の成就である、と。ここで“血”という用語を用いる時、それが旧約聖書の教えと一致していることを私たちに教えています。旧、新約とも同じ神であり、同じ救いであるからです。

バプテスマのヨハネは、……私たちの主を指して、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊（**ヨハネ1:29**）」旧約聖書のいけにえの教えに立ち戻らされます。

「イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解き放ち……」（**黙示録1:5**）

血とは言わずに死と言えば十分なのだと言う人々がおります。血というようなユダヤ的表現をやめて、死ということばを使った方がいいというわけです。

私たちは、キリストが十字架上で流された“血”によります。忘れやすい私は主日のパン裂きごとに思いを新たにさせていただいております。感謝します。（福島三弥子）



日々のみことば」をテキストにしての学びに入って2ヶ月になりました。小学生の頃の宿題のワークを、思い出すような問答形式です。慣れてくると種々雑多に詰め込まれていた知識やお話が頭の中で整理される心地よさと安心感に気づきました。

「ただ正しいことのみを、追求しなさい。」（申16章20節）主の目から見て正しいことと言われると、うな垂れるしかありません。雑誌の星占いなどを読んだりするのもよくないなあと、思いつつ覗いてしまいます。さすがに積極的に探してみることはありませんが。

繰り返し偶像を取り除くよう戒められています。そのくらい真剣に向き合わなければならないように、偶像礼拝の種はあちこちにあると言うことです。「貪欲は偶像礼拝です。」（コロサイ3章5節 ）

価値なきものを、主に捧げることから、偶像礼拝に入り込んでいくという解説にも、はっとさせられました。明らかな偶像礼拝はよけますが、気がついたら偶像礼拝にはまり込んでいると言う危険もあるという指摘にぎくりとしました。

自分の心の中を常に聖霊により、清く保つことの大切さを、再確認しました。長年の疑問だった「聖霊を冒涜する罪」（マルコ3章20節）は、分かり易い解説で、すっきりと理解できました。（66頁）（広瀬裕子）

御父は、ひとり子を犠牲にしてまで私たちを救う贖いの計画をされました。そのひとり子は父神の御計画通りに、人となってこの世に下り、十字架で人々のすべての罪を負って十字架にかかられました。

なんという驚くべき贖いでしょう。しかもこれは、国籍の違い、身分や生まれに関係なく、富む者も富まない者も、力の無い者でも、受け取ることのできるものです。

私のような者でも信じ受け入れることが出来たことは大きな幸いです。感謝です。そして、この贖いを自分のためのものだとして一人でも多くの人が信じ受け入れるように祈ります。（高橋美枝）

そこで、イエスは言われた。「あなたがたには神の国の奥義が与えられていますが、外の人たちには、すべてがたとえで語られるのです。それはこうあるからです。『彼らは、見るには見るが知ることはなく、聞くには聞くが悟ることはない。彼らが立ち返って赦されることのないように。』」（マルコ4:11～12）

種まきのたとえのこの箇所のメッセージには、「神の国の奥義は悟らせないためにたとえで語られたのではなく「よく聞きなさい」「聞く耳のあるものは聞きなさい」とあるように、真摯に悟りを祈りつつ求める者には理解できるのです。

しかし真摯に求める気がなければ、みことばの理解は閉ざされ、心は頑ななままになり、悟ることはできないのです。」とあります。

神様は、私たちの心が神様に向かうこと、すなわち悔い改めを待っておられます。

旧約時代には律法と預言者、新約時代にはイエス様、イエス様が天に昇られてからは弟子たちの働き、現代は聖書を通して私たちを救いへと招いています。

いつの時代も大切なのは私たち側の心の態度だと思います。神様からの招きに心を開くかどうか。今も神様はすべての罪人を招いておられると思います。私も身近な人の救いを祈りたいと思います。（永井亮子）

ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」（ロマ3:24）



私は、無力で、何の望みもない者ですが、ただ、神の恵みによって私を救ってくださいました。〈律法〉が与えられたのは、人を救うためではなく、むしろ、「養育係」として人を《救い主》に導くためである。と教えられました。その《救い主》イエス・キリストが私の罪を贖ってくださったのです。価なしに義と認めてくださるとは、何という恵みでしょうか。感謝するばかりです。（外處トミ）

さまざまな　試練を受ける　その度に
主のあわれみと　導きを知る
2024年1月31日

群馬県桐生市南公園の梅

すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」（ロマ3:23,24）

神様の恵みによってわたしたちの罪がゆるされ義と認められるとはなんと感謝なことでしょうか。自分の無力さに打ちひしがられるのではなく、主に信頼して日々歩んでいきたいです。（外處光歩）

ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」（ロマ3:24）

義認は、私たちが何かを行ってもたらされることではなく、私たちに関して神様が行われる一つの宣言であり、私たちが今、現在このとき、信仰を行使する瞬間に義と宣言されるということを教えていただきました。　自分自身を眺めたり、自分自身を頼りにしたりするのではなく、神様から全く無償の救いという賜物を与えていただいたことに感謝して、主に心を向けて歩んでいけたら幸いです。（外處結実）

それでは、私たちの誇りはどこにあるのでしょうか。それはすでに取り除かれました。」（ロマ3:27）

わかっているようでわかっていなかったことをつくづく示されます。救われたのは神様の一方的な恵みによ

り、数えきれないお導きの御業によるものなのに、救われたあとは自分の何かによって救われたと勘違いしてしまっていることに気が付かされます。

「キリストの血による、神の救いの道は、いかなる誇りをいだく余地も残さない。」と注解書に明記されている通りです。改めて自分が何者かによって選ばれたと勘違いしていたことをただ恥ずかしく思います。

自分が神様に選ばれた者という優越感を持つ誤った信仰と、逆に本当に救われているのかを心配した方が相応しいような信仰の間を行ったり来たりしている自分を示され、ただ主の前に頭を垂れるばかりです。

ただ、それでもあわれみ豊かな神様と主イエス様のとりなしのゆえに、忍耐強く守り導き続けていただいていることに感謝をするばかりです。（外處徳昭）

神はこの方を、信仰によって受けるべき、血による宥めのささげ物として公に示されました。ご自分の義を明らかにされるためです。神は忍耐をもって、これまで犯されてきた罪を見逃してこられたのです。26 すなわち、ご自分が義であり、イエスを信じる者を義と認める方であることを示すため、今この時に、ご自分の義を明らかにされたのです。」（ロマ3:25-26）

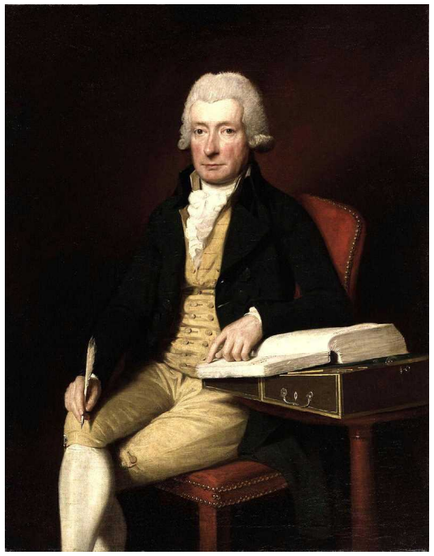
ロイドジョンズは、「多くの意味において、聖書全体のいかなる部分、いかなる箇所にもまして重要なのは、この二つの節だということである。ここにあるのは、『贖罪』という偉大で中心的な教理の典型的な言明である。……」と述べています。私は何十年もロマ書を読んできましたが、それほど重要な聖句だとは、まったく考えたことはありませんでした。

詩人ウィリアム・クーパー（1731-1800）は、「ある時、自分の部屋の中で、魂の苦悶と、深くすさまじい罪の確信を覚えていた。何の平安も見いだせず、ほとんど絶望の瀬戸際で行きつ戻りつしていた。

まるで望みがないように感じ、自分をどうして良いか分からなかった。切羽詰まった思いにかられて、やにわに窓際にあった椅子に腰を下ろしたところ、そこに1冊の聖書があった。そこで手に取って開くと、たまたまこの個所に目がとまった。その折のことはこう告げられている。

私の目に映った箇所は、ロマ３章25節であった。それを読むなり、たちまち信じる力が与えられた。（義の太陽）の発する光明が、燦々（さんさん）と降り注いだ。　自分が罪を赦され、全く義と認められるためにキリストが成し遂げられた罪の償いは、完全に十分なものであることが悟られた。

一瞬にして私は信じて、（福音）の平安を受けた。（全能の神）の御腕が支えてくださらなかったとしたら、感恩と喜びのあまり押しつぶされていただろうと思う。目には涙が満ち、感情のたかぶりのあまり言葉が言葉にならなかった。私はただ無言の恐れをもって、愛と驚異にあふれて天を見上げるしかなかった」。



William Cowper、イギリスの詩人、英国国教会の賛美歌作家

これが、ローマ人への手紙３章25節によって、かの有名な詩人ウィリアム・クーパーに起こったことである。同じことは、他の多くの人々にも起こってきた。」と紹介しています。

それが何と言っているか、もう一度思い起こさせてほしい。これは、使徒が24節で語っていたことの続きである。パウロの伝えたこの偉大な良い知らせによれば、今や私たちは、「神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められる」ことができる。

言葉を換えると、（律法）とは切り離された「1つの救いの道」があるのである。それは、私たちが律法を守ることには基づいていない。それは、キリストのうちにあるこの「価なしの道」である。

神は、キリストにおいて身代金を支払い、私たちを受け戻してくださった。そして、この25節、26節は、いかにしてその身代金が払われたかを説明している。しかし、なぜこれは、そのようなしかたで起こらなくてはならなかったのだろうか。なぜ、このような次第となるのだろうか。

それを説明する２つの偉大な言葉は、すでに考察してきた。「なだめの供え物」、そして「血」という２つの重要語である。また、そのようなしかたで買い取られた贖いが私たちのもとにやって来るのは、信仰という手段を通してであることも分かった。



しかし、使徒はそこでは止まらない。さらに語ることがある。もう一度この言明を眺めるがいい。

「神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現すためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。それは、今の時にご自身の義を現すためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです」

なぜ使徒は、こうしたことについて引き続き語るのだろうか。なぜ最初の言明を語って、そのままにしなかったのだろうか。このような言明をつけ足すことに何の意味があるのだろうか。

第１に、「公にお示しになる」という用語である。それは、「明らかに現す」「あからさまに示す」ことを意味する。ここには、如実に私たちの死活に関わる重要なことがある。それは間髪を入れずに告げるのである。

カルバリに立った（十字架）上における主イエス・キリストの死は、不慮の事故ではなかった。神のみわざであった。神こそ、そこで主を「公にお示しに」なったお方である。……この用語がやはり強調しているのは、この行動の公的な性格である。このことは、神の大いなる公的行為である。

神はこの時、世界史という舞台の上で、あることを公然と行い、それが目撃され、眺められ、明確きわまりないしかたで記録されるようにされた。これまで世に生じた中でも最も人目につく行動としてである。このようにして神は、公然と主を、「その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました」。

キリストの十字架には、２つの意味があったことが分かります。１つは、「神の義が現されたこと」、そしてもう1つは、「私たちが信仰によって義と認められる基礎が与えられた」ということです。

「こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者が義とされる方となるためなのである」と教えられているとおりです。

私たちは、キリストの十字架をとかく私たちの罪の救いのためだけだと思いがちですが、もう1つの面、もう1つの意味があったということを見落としてはなりません。これは、さらに重要なことだからです。

キリストの十字架は、神が正しいお方であることを、神ご自身が立証されたという重要な意味を持っています。このことがなければ、私たちの救いも、実は土台を失ってしまいます。

私たちの救いが大きな意味を持ってくるのは、信仰義認という教えが、罪人をそのままで義と認めるということは、黒を白ということにほかならず、つまり誤りを正当化する教えだという非難攻撃に対して、弁証しているところにあります。

しかしながら、もしも何の裏付けもなしに、ただ神が自由に罪を赦しているのであるとしたら、このように批判されてもしかたありませんが、キリストの十字架という出来事によって、「神の義の要求」と「愛の要求」が、それぞれ満たされたのですから、このような批判は、全く的外れと言わなければなりません。

神は決して間違ったことをなさったのではありません。また、そのようなことをなさるお方でもありません。それが神の義なのです。十字架の第一義的な意味はこのことです。

その上で、神はこの恵み深い贖いのみわざによって、主イエス・キリストを信じる者を義と認め、救ってくださいます。なんと完璧な救いの道でしょう。主を賛美します。（福島勲）

貴重なご感想をありがとうございました。

次回は、日々のみことば３月号か「ローマ人への手紙（3:29～4:12）の感想を４月10日までに福島兄弟へお寄せ下さい。（永井）